
俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

迷彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

【Nコード】

N3253Y

【作者名】

迷彩

【あらすじ】

ヤンキーっぽくて口調も態度も荒い。けど実はブラコンで甘えん坊な妹を持った主人公の日常をグダグダ書き殴った物語。
リア充爆発しろな話にしたい。

妹のヤンキーっぽさはすぐ崩れる（前書き）

遂にやってしまった。反省はしているが後悔はしていない
つまらなく感じたらどうかブラウザのバックを押してください

妹のヤンキーっぽさはすぐ崩れる

——朝だ。

ただの朝ではない。

今日は……………月曜日なのだ——

いや、だから何だって話なんだが。月曜日の朝ほどやる気の出ないものはそんなにないと思う。

月曜日の前日である日曜日が学生のほとんどが休みであるからこんなにかつたるい気分になるのだろうか？

前日に惰眠を貪った分、また面倒な日々が始まると感じられる朝……………少なくとも良い気分にはならない筈だ。

自分がもう少し朝に強い人間であるならこの気分ももう少し良いものなのかもしれないと一瞬思ったが、起きる時間を考えるとむしろ自分は朝に強い人間だろうから関係無いのだろうと思いなおす。

……………というかい加減起きますか。

○

———現在時刻 AM 4:00

普通の学生が起きる時間としては大分早い時間だと思う。

まあ朝練のある部活をしている＆家が学校から遠いとかそんな事情があればこんな時間に起きたりもする学生もいるかもしれないが、俺は帰宅部であって朝練など無い。

それならどうしてこんな時間に起きているのかというと……

バン！

「おい兄貴！ さっさと起きろ！ ランニング行くんだろ！？ 飯も作るならもう起きる時間だろうが！！」

———妹の世話をしなければならぬからだ……

ああ、正直これだけでは意味が分からないし、お前説明する気あるの？ って言われても文句は言えないからちゃんと説明するとしよう。

1、俺は妹の為に毎朝1時間ランニング&筋トレ等のトレーニングをしなければならない

2、俺は現在家にいない両親の代わりに家事をしなければならない

つまりこういう事である。

あれ？……このままだとまた説明不足だな……すまない、説明とかは苦手なんだ。

……えーと、1の妹の為に体を鍛えるってのはやんちゃな妹を体を張って助けられる為って事で、

2の両親の代わりってのは、今は両親が海外にいるためで、（少し詳しく言うなら父親が単身赴任↓母親が家事のできない父を心配して付いて行った）妹も家事ができない今、唯一家事のできる俺が朝早くから料理の準備をしなければならぬからだ。（妹の家事能力は酷い。おそらく父親の遺伝なんだろうな……。）

以上が俺がこんな朝早くに起きる理由である。

「おい兄貴聞いてんのか！？ 起きてんだったらさっさと着替えて走りに行けよ！ 兄貴が遅れたら飯も食えなくなるんだからよ！」

ちなみに何故 my sister が俺の部屋に来ているかというと、今妹が言った通り俺のランニングが遅くなると朝飯ができる時間が遅くなって、下手をすると朝飯が食べられなくなる……いや、流石にそれは無いか？ とりあえず俺が作る食事は食えなくなるが学校に行く途中にあるコンビニで買えばいいわけだし。

何故か俺の妹は朝飯は俺が作った物が良いらしく、店で買った惣菜物とか俺の手が入っていない物（冷凍食品とかレトルト物とか）を食べると酷く機嫌が悪くなるのだ。

……まあ、正直これは悪い気はしない。

可愛い妹が自分の料理しか食べたくないというのは結構うれしいものだ。

妹が中々の美少女であるというのも一役買っている。

ちなみに何故こんな時間（午前4時）にこの子が俺の部屋に来ているのかというと、前日の夜に夜更かししていた俺がちゃんと起きているのか確認しに来たのだろう。

起きていなかったら起こしてくれたんだろうな！。

……朝目覚めたらそこには美少女の顔とかリア充っぽい？

もう少し目が覚めるのが遅ければ月曜の朝特有の気だるさなど無くハッピーな気分で起きたものを！
いつも通りに目覚める我が肉体が憎い！！

「……おい兄貴聞いてんのか？ 無視か、あたしの事無視してんのか！？」

……無視しないでよおおにいちゃん……あたしの事嫌いになっちゃったのお……？」（メソ）

ちよっおまつ！

「あー無視してないって、少し考え事してただけだから！ お前の事を嫌いになったわけでも無いし嫌いになるわけ無いから！」

こんなに愛しい妹を嫌いになるなんてとんでもない！

「……ほんとう？ きらいじゃない？」

よーしよしよし、なんとか泣くのは回避できたな

「ああ！ 嫌いじゃ無いとも！」

「じゃああたしの事好き？」

「ああ好きだ、大好きだよ」なでなで

まったく・・・可愛い奴だ、頭を撫でてやろう

「……バツ、バツカじゃねえの！？ 妹に大好きとか言ってるじゃねえよ……ってか撫でな！！」
／／／／／

……本当に可愛い奴だ。

これで普段は荒っぽい言動をしていてヤンキーっぽいと言われて
いるなど誰が思うだろうか？

この姿を見た人間はそのギャップと可愛さに心を奪われてしま
うに違いない。

……俺限定でしか見せない姿だけど、これは勝ち組と考えてい
んだろうか？

妹のヤンキーっぽさはすぐ崩れる（後書き）

何か直すべき所があれば感想にどうぞ。

ただし作者の心は硝子でできているため、あまりキツイ言い方はやめてね。

中傷とも取れる物は無視、あるいは削除させていただきます。

※改行で間を開け過ぎていたので修正&本文の一部を微修正

・・・それにしても適当に書き殴ったがちゃんとできているだろうか？

自分ではよく分からないから中々不安になるのだけれど

俺と妹の一日の始まり（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品です。
気に入らなかったりした方は素直に戻るを押してくださいな。

俺と妹の一日の始まり

さてさて、とりあえず日課のトレーニングを終わらせて家に帰り、シャワーで汗を流す。

そうすると時間も少々経っているのでそろそろ朝食の準備をしないといけない。

我が家の朝食は基本的にご飯、味噌汁、卵焼きの和食セットか、トースト、スクランブルエッグ、サラダの洋食セットを交互に作る。

まあ大体がそうだというだけであってその時の気分で変えたりと自由にやっているんだけどね。

今日は別に変わった物を作る様な気分でも無いし、昨日は洋食セットを作ったので味噌汁の準備だ。

「このくらいの料理はあいつも作れるようになって欲しいもんだがなあ……」

そしたら兄妹で交互に作れるようになるし俺の負担も減るんだが。

「まああいつはちゃんとした掃除ができるようになったばかりだし今はまだいいか」

……そう、そういえばまだ一度も名前が出ていない我が妹の雫は、

つい最近やっと掃除ができるようになったばかりだ。

それまでは散らかすだけ散らかし、それを片づけるようなことはせず全部俺に丸投げ。

それを注意すればただ一言「うっせえ！」とだけ言い放って逃げて行く。「去って行く」ではなく”逃げて行く”ので、あの子もこのままでは駄目だというのは分かっていたようだが……どうしても甘えてしまい直す気にならなかったのだろう)

流石にずっとこのままでは駄目だと思い、雫に言う事を聞かせる禁断の一言である「言う事を聞かないと嫌いになるぞ?」と言ってやっと直す気になったのだ……まあその一言を聞いた途端泣きながら掃除の仕方を聞いてきた雫を泣き止ませて、そこから掃除道具の場所やら使い方やら掃除の手順やらを説明し、失敗して涙目になる雫をなだめて繰り返し教え直し……とあまり順調には行かなかったが。

まあそもそも2・3日ですぐ出来るようになる物では無いしなあ。
(俺が求めるのはちゃんと彼女が自分だけの力で最後まで行い、その後部屋を見れば”綺麗だ”と思えるような清掃能力であるからだ。そもそも掃除以前に散らかした物を片づけるという事すら出来て無かったし)

結構な期間をかけてなんとか清掃能力を身に着けさせたのだ。

それまでは家事能力0どころかマイナスの奴に一から教えて、ちゃんと力が付いたのだから成功したと言えるだろう。

そこからすぐに料理にまで手をつけるのはまだ駄目だろう。

別に今すぐ身に付けなければこの家はお終いだあ！ってな状態でもないし、流石にまた「嫌いになるぞー」と言っって言う事を聞かせ

るような真似はしない。

俺だってあの子を進んで泣かせようと思っっているわけでは無いのだ。

何よりそんな連続で新しい事をやらせてもやる気がでないだろうし、強引にやらせてもちゃんと身に付かないだろうしな。

……妹の成長と今後の教育方針を考えている間に料理ができたよ
うだ。

思考に耽っている間にも俺の体は動き続けていたらしい。

流石にここ何年間続けただけの事はある。

我が友人に「君は立派な主夫だな」と言われるのも無理は無いの
だろうな……。

あの時は否定したが自分でもそう認識してしまうのはどうなんだ
ろうか……。

○

さて、料理も完成したし我が愛しい妹を起こしに行くでしょう。

どうせ俺を起こしに来た後二度寝しているに違いない。(そもそ
も俺は起きていたが)

まあすることも無いのに4時に起きても寝るしか無いだろうから
仕方ないけど。

「おーい、雫ー？ もう7時だぞー起きなさいー」

シーン…………

どうやら完全に熟睡しているようだ。

まあ4時に起きてからすぐにまた眠れたとも思えないし仕方ないだろう。

中途半端に起きてから眠るとどうしても起きるのは遅くなるしな。とはいえ、寝坊させるわけにはいかないし……

仕方ない、直接起こすしかないか。

「零ー？ 部屋入るぞー」ガチャッ

一応声を掛けて部屋に入る。割と大きめの声で言ったがまだ起きはしないようだ。

零の部屋は普段のヤンキーっぽい雰囲気とは違って、とても女の子っぽい内装をしている。

黄色いクマのぬいぐるみや大きな丸い耳が特徴なネズミのぬいぐるみ、耳の大きなゾウの様な動物のぬいぐるみなど、某夢の国の住人達が多い。

……というのは嘘である。

何かのキャラクターだとか、そもそもジャンルが決まっているわけでも無く、とにかく沢山のぬいぐるみであふれ返っているのだ。

実はあの子に掃除を教えたのは他の家事をしながらこの部屋を掃除するのがかなり大変だからだったりする。

時間が経つとすぐに埃が溜まるし、ぬいぐるみを退けて掃除してもそれを元の場所に戻すのが大変なのだ。

どうやらそれぞれの配置が決まっているらしく、場所を間違えると怒られてしまう。

何とか場所を覚えても雫の気まぐれで配置が変わられたりすると目も当てられない事になるしなあ。（というかよくこの数のぬいぐるみの配置を覚えられるな……）

これでも昔のように節操無く買い漁ったりしなくなった分まだ楽になった方なのだが、これを機に自分で掃除させようという事になったわけだ。

「やばい、またどうでもいい事を考えて時間が経ってしまった……」

早く起こさないと味噌汁が冷めてしまうしね。

雫のベットに近づいて行く。

「スウー……スウー……んー兄貴……」

ん？ 俺の夢でも見てるのか？ これは気になるな。

妹が兄をどう思っているのか分かるかもしれない。

少し様子を見よう……今日は料理が早く出来たし時間には余裕がある（味噌汁が冷めたらまた火を入れればいい。そんな手間は俺に

対する評価に比べればどうという事は無いしな)

「んう・・・美咲が兄貴を獲物を狙う野獣の目で見てる・・・兄貴はあたしが守って・・・んう・・・あにゆきい・・・うへへ・・・へ・・・」

三点リーダーが多いわ！　じゃなくて俺に対する評価じゃ無かったようだ。ちよつと残念。

そして後半は聞かなかった事にしておこう……

ちなみに今出てきた美咲みいさきというのは雫の数少ない友人であり、俺の後輩でもある女の子だ。

肩まで伸ばした黒髪に口元の黒子が特徴でかなり大人びた子である。

荒っぽい言動をとる雫に恐れずに近づき、あの子の友人になってくれた中々しつかりした子であり、俺は美咲ちゃんと呼んでいる。

美咲ちゃんの御蔭でクラスで浮いていた妹はクラスに受け入れられたらしく、その時は雫も嬉しそうにしていた(実際はかなりツンデレっぽい態度をとっていたが、ある意味分かりやすい)

俺に対する評価では無かったし、いい加減起こすでしょう。

まずは閉まっているカーテンを開けて太陽の光を部屋に入れる。

その後雫が寝るときにいつも抱いているイルカの抱き枕を抵抗を押さえて取り上げながら一言、

「こらあ！　朝だぞ雫！　起きなさい！！」

まるでお母さんみたいだと自分で思った。

「うー後5時間……」

「長いわッそんなに寝てると遅刻するだろうがッ！」

阿呆な事をぬかしたのでぬいぐるみの代わりに掴んでいた掛け布団を強引に奪ってやる。

その勢いで my sister は『ドスッ』と鈍い音を立ててベットから落ちた。

「……何すんだ馬鹿兄貴！ ベットから落とす事ねえだろ！ 痣でもできたらどうすんだよ！」

「大丈夫だ、問題無い。というかお前の体に痣を作る様な事を俺はしないし、その高さで痣を作るほどお前の体は軟くない」

「あたしが起きるのが遅くなったのは兄貴を起こすために早く起きたからじゃねえか。もう少し優しく起こしてくれよ……」

んー……確かにそうだったかもしれない。

いくら雫が阿呆な事を言ったとしてもそもそも悪かったのは昨夜夜更かしをして今朝ちゃんと起きれるか心配させた俺だし、ベットから落とすのは流石にやりすぎだったか……。

「あー、確かにやり過ぎだった。すまん。お詫びに今度何か言う事

1つ聞くから許してくれないか？」

「え、マジで？ それって何でもいいのか？」

「ああ、俺ができる事なら何でもいいさ。……でも常識的な範囲で頼むぞ？」

「そうか、何でもいいのか……何を頼もうかなあ……一緒に寝てもらうとか……」ブツブツ

「あー考えるのは後にしてくれ。とっとと着替えて降りてこい、飯食って学校行くぞー」

「はいはい分かったよ、じゃあ着替えるからさっさと出て行けよな！」グイッ

「おっとっと、すぐ出て行くって。そんな押さなくてもいいだろうに……」

さて、とりあえず味噌汁を温め直すとするか、ぬるい味噌汁を飲ませて怒られたくないからな！。

———こんなぱつと見て日常の些細なやり取りも、また新しい一日が始まったという実感を与えてくれる大切なものなのであった。

俺と妹の一日の始まり（後書き）

相変わらず短いのは仕様。

ちなみに主人公が夜更かししたのは単純にネットで二次小説を読み漁っていたから。

それで寝坊しても自業自得だね。

俺の学校生活（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品でござる。

気に入らない事があつたりしちゃう方は戻るを押してください。

俺の学校生活

妹と二人で食事を取る。

今まで何度もあったいつもの光景だ。

「兄貴、ご飯お代わり」

「あいよ」

雫は女の子の割に結構な量を食べる。

……正直太らないのが疑問だが、そこはこの子の問題だろう。
今までそれで太りはしなかったしな。

「それで雫、今日も放課後は部室か？」

「もぐもぐ……ごくっ そうだよ。兄貴も来るんだろ？」

「まあ他にやる事も無いし構わんがそろそろ部活っぽい事をした方が良くないか？」

「別に良いじゃねえか。今までそれでやってきたし、あたしは今を
気に入ってるしな」

我が妹は部活に入っている。

———その名も護身術部———

何だそれ？と思うのも仕方がない。

この部は雫が作った部活だからだ。

部の活動内容としては名前通り、護身術を習うものだ。

別に何を習うか決まっているわけではなく、ただ自分の身を守れるように鍛えようっていうものでしかない。

部員は部の創設者であり部長である雫と部員である俺、美咲ちゃ

んの3人だけで、そもそも人数が一人足りないため”部”ですら無く、”同好会”となっているのだが。

というか格闘系の部活は既に、

- ・柔道部
- ・空手部
- ・合気道部
- ・ボクシング部
- ・テコンドー部
- ・レスリング部
- ・相撲部

……と、正直俺もあまり把握できてないから全部は言えないがパッと思いついただけでこれだけあるのだ。

マイナーな物も加えればもっと沢山の格闘系の部活がある事だろうし、部長である雫がまともに部員の勧誘をする気が無く、部の宣伝すらしていないためそもそも護身術部の存在すら知らない人間の方が多だろう。

……というか俺の友人以外で知っている奴は全然いないと思う。

そもそもさっき言った部活内容も建前でしかなく、道場があるわけでもないのに、（元々まともにやる気がなかった雫が道場の使用申請をしなかったため）ただ部室に3人で集まって喋ったりするだけのものしか無い。

これって護身術部じゃなくて休憩部じゃね？と何度も思ったものだ。

実際に部活の名前に合うような事は全くしてないし。

「せめてもう一人くらい部員を確保した方がいいんじゃないか？ず

つと同好会じゃ格好付かん気がするんだが」

「もぐもぐ……ごくっ 別に良いじゃねえか。あたしと兄貴、それと美咲の三人がいればさ。同好会だからって潰される訳じゃねえしよ」

「確かにそうだけどな……」

まあ無駄にデカイ学校だからその分部屋が余ってるのは当然なわけ……

というか護身術を学ぼうと思ってる人間は合気道部とかに行くだろうし、入る人間は早々いないか……

そもそも新入りが入る可能性があったとしても雫が怖いだろうし……雫が知らない人間の入部を歓迎するわけないし、雫を知っている人間は基本雫を怖がっているからなあ。

……部活(?)の事を考えていたせいで食事があまり進んでいない、いい加減ちゃんと食べ始めよう。

「ごちそうさま」

「ってはや!？」

「いや、あたしが早いんじゃないかって兄貴が遅いんだろ? また何か考え事してたのか?」

「いやいや考え事はしてたけど俺が遅いなんて事は……」

ってかまだ食べ始めてから20分しか経って無……って20分!?!? わーお、思ったより時間が経っていたようだ。

また無駄に思考に没頭してしまった……。

「じゃああたしは先に行つとくからなー!」 ガチャツ

どうやら雫は行ってしまったようだ。

……待っていてはくれませんよねー……。

仕方ない、急いで食事&戸締り等の出発準備を済ますとしよう。

○

学校に着いた。

俺や雫の通う学校はかなりでかい。

どの位かと言うと……とりあえずバカみたいにデカイと考えてくれ。

朝も言った通り俺は説明とかが苦手なんだ。スマン。

それよりもとつとと教室に行くとしよう、朝色々手間取ったのもあつて時間があまり無い。

キーンコーンカーンコーン……

ってヤベエ！ダッシュだぜえええええええええええ……

○

「ゼエ…ゼエ…死ぬ…嘘…死にはしない…俺は…ミラクル…」

何とか間に合いました。

超絶疲れたけど。

校門に入った直後に本令の鐘が鳴ってそこから靴を履き替え、割

と遠い校舎まで行き

階段を上る。

それをずっと全力疾走で行ったせいでかなり疲れた。

……担任が少し遅れて来たおかげで助かった。

「あーこれより出席を取るから、元気に返事するようにー」

しかし危なかった。

俺のクラスは遅刻すると鞭で叩かれ……はしないが、担任が英語教師な為英語の課題プリントをやらされる&英語の成績の意欲・関心の部分にマイナス評価が付くのだ。

クラスというか担任教師の方針だな。

普段の態度はやる気なさげなくせに、その態度に見合わないシビアナ評価を付けやがる。

まあその分クラスに何らかの形で貢献するとプラス評価を付けてくれるし、まともな学校生活を送っている生徒にとっては割と良い先生だ。

俺だって今日は少し遅れかけたけど普段は余裕を持って登校してるし。

「瀬川ー、瀬川はいないのかー？返事が無いって事は欠席でいいんだなー」

おうふ、ヤバい呼ばれてるじゃないか。

「あーすいません先生。瀬川十夜出席してまーす」

「おーいたか……ったく、次はもっと早く返事しろよー？」

「すみません」

……そういえばずっと名前を言って無かったな。

俺の名前は瀬川^{せがわ}十夜^{とおや}だ。

これからよろしく頼む。

俺の学校生活（後書き）

お気に入り登録してくれている人がいる…だと…？
良いんですか、こんな駄文を登録しちゃって？

こ、ここ後悔すすするんじゃねえぞコノヤロウ！

……登録ありがとね、ありがと。

俺と妹の昼休み（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品である。

気に入らん事がある奴は大人しく戻るを押すのDA！。

○↓場面の移り変わり

◆↓視点変化

俺と妹の昼休み

午前中の授業が終わって昼休みである。
昼食は購買で買う事もあるけど基本俺が作った弁当だ。
雫にも俺が作った弁当を持たせている。

「さて、それじゃあ食べますかね」

登校する時全力疾走したのもあって余計に腹が減ったぜ。

「あ、十夜。僕も一緒に食べていいかな？」

「ん？ 聡里か。勿論良いぞ」

こいつの名前は明石聡里あかし さとり同じクラスだ。

俺の友人で僕っ娘、背中の後ろまで伸ばした綺麗な茶髪をしている。
る。

感情をあまり表情に出さないし、本人も一歩引いたように人と接するせいかあまり人との付き合いをしない奴だ。

しかも何故か女なのに男の制服を着ているという変な奴だ。

——普通女子は可愛いって人気なウチの制服を着るんだが、どうしてこいつは男子の制服を着てるんだろうか？もしかして実は男の娘だったとか？

……いや、こいつ自身が女だって言ってたしな。

「……何か失礼な事考えてない？」

「滅相もない。俺がそんな事を考えるとと思うか？」

「思う。……具体的には僕の服装とか性別とか」

即答ですか。

「まあとりあえず弁当を食べようじゃないか」

「誤魔化したね……まあいいや、さっさと食べよう。僕は購買で買ったパンだけど」

「俺の作った卵焼き食うか？」

「貰えるなら貰うよ……（パクツ）ん、相変わらず良い腕してるね」

「日々の努力の積み重ねだな」

「それと愛情かい？」

「ああ……勿論だ。元々妹のために作ったついでだからな。美味しくできるよう努力するに決まっているじゃないか」

「（相変わらず妬けるね……もう）まあその”妹さんへ”の愛情籠った美味しい卵焼きを分けてもらってるんだ、さっき失礼な事を考えていた事は帳消しにしてあげるよ。」

忘れてなかったのか……しかも何か嫌みったらしい言い方をするのは何故だ……

「というか俺が失礼なことを考えていたってのは確定なのか？」

「そうだよ。君の考えている事は分かるんだ。僕に対する事限定でね？（最も……僕を”女”として意識してないって事も分かっちゃうんだけどね……絶対女として意識させてやる……フフツ）」

うお！何だ！？何か背中にゾクツと来たぞ！！

「……流石、名前が”さとり”なだけあるな」

「君が僕について考える事だけだって言ったでしょ？それに人間の考えが全部読めても楽しくないと思うんだけど」

「確かにそれはそうだな……ってか俺の考えてる事を読むのは楽し

いのか」

「僕について考えている事”だってさっきから何度も言ってるじゃないか。”僕の能力”と言うより”乙女 of 能力”だよ、あと楽しいね」

「乙女 of 能力ねえ……男 of 制服着てる奴が言う事か？」

「だってスカートも可愛いとは思うけど、あれってスースーするじゃないか。階段降りるときの下から来る男子 of 視線が煩わしいし、座る時も一々スカートを気にしてすわるのも面倒だしね」

「ふーん（そんな理由かよ）……まあ別に似合ってるしいいか……ごちそうさん」と

「会話 of 締めを”似合ってるから”で済ますなんて……御馳走さま」と

「何でもいいだろ実際似合ってるし、ボーイッシュって奴？」

「はあ……もう良いよ……卵焼きありがとね。時間も迫ってるし、僕は自分の席に戻るよ」

「お、もうそんな時間か。楽しい時間はあっという間だな」

「た、楽しいだなんて……フツツやっぱり君は天然ジゴロってやつだね（ボソツ）」

「ん、何か言ったか？」

「何にも言って無いよ」スタスタ

こうして昼休みは過ぎて行くのだった……



さーてやっと退屈な授業が終わったぜ。
早く兄貴が作った弁当たべよーと。

「あら雫ちゃん。授業じゃ死んだように寝てたのに、終わった途端に起きるなんて流石ね？」

あ？誰だ……ってあたしを”雫ちゃん”何て呼ぶのはあいつしかいねーか

「美咲か。お前も一緒に食うか？兄貴の作った弁当はやらねーけどな！」

「もう、一口くらいくれたっていいじゃない。いつも美味しそうに食べるんだから味が気になるのよ」

「そんなこと言ったらって本当は兄貴の作った料理を食いたいだけだろうが！？これは兄貴があたしの為に作った弁当なんだから絶対やらねーぞ！！」

「（もう……十夜先輩の作った料理を毎日食べられるなんて羨ましいわね）……分かったわ。今回は諦めますよーだ」

ふん、どうせ明日も欲しがるくせに……兄貴はあたしのだ……あにきい、あにきの愛情が詰まった弁当おいしいよお……えへへえ……。

「（凄い良い笑顔しちゃって……また十夜先輩の事考えてるのね。いつもこんな笑顔をしてたらもっとすぐ受け入れてもらえたでしょうに。元々可愛い顔してるしスタイルもいいから羨ましいわあ……ま、最初は十夜先輩目的で近づいたけど、彼女自身とは良い友達になれたし何よりこんな可愛い笑顔が見れるんだから役得って奴ね……うふふ）」

うお！何か背中にゾクッてきたぞ！？何だってんだ……って

「あ……弁当食べ終わっちゃった……」

「別に家に帰れば先輩の作った料理を食べられるんでしょう？そんなに残念に思う事無いと思うけど」

「家で作ってくれる料理から感じられるけど、弁当にはまた一段と兄貴の愛情が感じられるんだよ！」

「そ……そうなの……（また凄いブラコン度合いを見せてくれるわね……）」

兄貴はあたしの為にトレーニングの後で疲れた体に鞭うっていつも美味しいごはんを作ってくれるんだ。

朝ごはんだけでも手間が掛るのに、弁当も作ってくれるなんてやっぱり兄貴は優しいんだ！

弁当を作らずに購買で買って食べるっていう手もあるのに、兄貴は自分から弁当も作るって言うてくれたんだ。

兄貴……好きだよ。

まだこの気持ちで兄妹としてか異性としてかは分からないけど……きっといつか答えを出して見せる。

だから……その時まで待っていてくれよ……。

キーン
コーン
カーン
コーン

「雫ちゃん？チャイム鳴ったし早くお弁当片付けなさいよ？私も席に着くから」

「わ、分かってるよ！」

ちくしょう……良い感じで終われると思ったのに……。

——余談だが、十夜と雫の背中にゾクツと来たのは全く同じタ
イミングだったりする。

俺と妹の昼休み（後書き）

どううでもいい事ですが、感想受付の制限をなくしました。
ユーザーでは無い方も感想を書く事ができます。

そういえば人物設定とか書くべきなのだろうか？
……まあまだそんなに話数も無いしいらないか。

あ、一話のタイトルを修正しました。

俺と妹の放課後（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけの作品ですよ。

自らの意向に沿わない部分がある方は戻るを押す事をお勧めしますわ。

俺と妹の放課後

やっと今日の授業が終わった。

だるいわー英語本当にだるいわー……。

「お疲れ様。分かっていたけど本当に英語が苦手なんだねえ君は。」

「ああ、だって文法がどうかわけが分からんし、そもそも学校で習う程度の英語が本当に役立つのかすら疑問だったのに長文の読解なんてやらされたら氣力がもたんよ……」

「テストの時はまた僕が教えてあげないと駄目なんだね？」

「ああ、頼むよ。俺の力じゃ勉強の仕方すら分からん。まあ赤点すら回避できればいいからさ」

「仕方ないなあ……ま、テストが近づけば教えてあげるよ。君は今から護身術部に行くのかい？」

「ああ、行かないと妹に怒られるからな」

ただ3人で集まってくっちゃべってるだけだなー……

「そうか、じゃあ行ってらっしゃい（僕ももう少し運動神経があれば入部するのに……）」

「おー行ってくるわー」

じゃ、行くとしますかね。

○

「へーいお兄さんがやってきたぞー後輩達よー」ガチャッ

……ってあれ？ 雫がいない。
いつも俺より早く来てるのに。

「雫ちゃんなら今日は掃除当番ですよ、十夜先輩」

「……俺に言わなかったってことはあいつ忘れてたのか？」

「はい。授業が終わってすぐここに来ようと思いましたけど、今日は月曜日ですからね。当番交代を忘れてたんでしょう」

ウチの学校は放課後に掃除をする。

一週間決まった場所を掃除して、週が済んだら別の人と交代するのだ。

「掃除がある事を知って慌てて掃除場所に走って行きましたよ。『早く終わらせて兄貴に会いに行くんだー！』って」

「そこで掃除をサボらずにちゃんと行く所が偉いよなあ」

あいつはヤンキーっぽいけど実際のヤンキー（この場合は不良の方が合ってるか？）とは違うからな。

「まああの子の事ですしすぐ終わらせてきますよ」

「じゃあ俺はそれまで読書するけど美咲ちゃんは どうする？」

「そうですね……じゃあ先輩。膝枕してもらっていいですか？」

え？

「すまん、耳がおかしくなったみたいだ。もう一度言ってくれ」

「うふふ……先輩、膝枕してください☆」

「…………マジで？」

「マジです」

まあ別に良いか、膝枕ぐらい。

ただ眠たくて枕が欲しいだけなんだろう。
雫にも何度かしてるしな。

「分かった君の好きにしてくれ」

「じゃあ先輩、少しお借りしますね」ぼすっ

そう言うやいなや美咲ちゃんは俺の太腿に頭を乗せた。

「男の膝枕なんか硬いだけだろうに……」

「そんな事ありませんよ、気持ちいいです。（先輩の膝枕……ああ
私今幸せだわ。何事も言ってみる物ね）」

「つてか美咲ちゃん眠いのか？俺の膝枕なんて」

「（もう、相変わらず鈍感ですね……）さあ、どうでしょうね？」

「俺はこのまま本読むからな」

「はい、先輩はそうしてください（それにしても先輩の膝枕安心す
るわ……このままじゃ、本当に眠っちゃう……かも……）」ZZZ
ZZZ

あ、本当に寝ちゃった。

眠かったんだな……可愛い寝顔してんなあ……。

つとと、寝顔を見るのは失礼かな？大人しく読書しましょうかね。

10分後……

「（ううー思ったより遅くなっちゃった……）兄貴ーいるよなー？」
ガチャッ

「……ん？お、やっと来たか雫。遅かったな」

ピ
キ
ツ

あれ、何か雪が硬直したんだが……どうしたんだ？

「おい、雫どうした？」

「……な……で……」

h?

「なんで……」

「おい、本当にどうしたんだ？」

わけがわからん。

「なんで美咲が兄貴の膝枕で寝てんだよオオオオオオオオオオオ
オオオオオ！！！！」

うお！うるせえ！いきなり大きな声出すな！！

「いや、これh」どうしてだどうして美咲が羨ましいズルイ兄貴の太腿ってか兄貴はあたしのなのに勝手に膝枕で寝るなんて許せない羨ましいゆるせないうらやましいユルセナイウラヤマシイユルス……」怖いわ！一端落ち着けての！！」ペシッ

何か簡単には元に戻りそうに無いので軽く頭をたたいてやる。
 つつーか俺の太腿も俺自身もお前の物じゃねえよ！

「あいてっ……うー何で兄貴の膝枕で美咲が寝てんだよ……あたしだって最近やってもらって無いのに……」

「いや、何か美咲ちゃんがして欲しいって言うからさ……」

「だったらあたしにもしてくれよ！」

「あっああ分k「絶対だからな!」? 分かったって……」

全く甘えん坊な奴だ……お?

「うーん…何ですか…うるさいですね……」

どうやら美咲ちゃんが起きたようだ。

「おい美咲! 何でお前兄貴の膝枕で寝ようと思ったんだよ!!」

「あら、雫来たのね。そんな事決まってるじゃないの……うふふ」

「ちくしょー…ちくしょー…(あたしも家で膝枕してもらえらるうけどやっぱ悔しい……ってそういえば!)……おい、兄貴!」

「うお! な、何だ?」

だからいきなり大きな声を出すんじゃないっての……

「今すぐ帰るぞ! 早く帰って膝枕してもらおうからな!」

「あ、ああ……俺は良いが……」

美咲ちゃんはとうするんだ?

「あ、それなら私も帰りますね? 今日は良い思いもできましたし……うふふっ」

「(っく、美咲め……。笑ってられるのは今のうちだからな!) 兄貴、今日の朝何でも命令聞くて言ったよな?」

ん……？なんの事……ってああ、雫をベットからおとしてやりすぎたお詫びに……って奴か？

命令じゃなくて言う事を聞くって言ったんだが……まあそれはいいか。

「ああ、確かに言ったが……決まったのか？」

しかもこのタイミングで？

「ああ、今決まったよ……ずばり、あたしの命令は【今日の夜一緒に寝る事】だ！」

「な、なんだってー！？」

いや、お前……

「高校一年生にもなってそれはどうよ……」

「べ、別に良いだろ！？……それとも、あたしと寝るのは嫌か……？」（じわっ）

な、潤んだ目で上目遣いだと！？

「べ、別にかまわん！一緒に寝てやろう！！」

「な！？男女が同じ布団で眠るなんて不純です！」

何か美咲ちゃんが俺より動揺してるっぽいんだが……何故に？

「いや、別に兄妹だし構わん」それでもです！！バカなんですかあななは！？」お……おう」

何か怒られた……（・ω・）シユン

「（あ、可愛い……じゃなくて！）だめよ雫ちゃん！私は認めないわよ！！」

「はん！美咲に認められなくても関係無いんだからな！……兄貴はいいんだろ？」

「（・ω・）……え？ああ、構わないけど」

「ほらな！あたしは兄貴と寝るんだよ！ほら兄貴、すぐ帰るぞ！」
「ダッ

——そう言う雫は俺の手を取って走り出した。
勿論俺と自分の分の荷物をもって。

「くっこれで勝ったと思わないでよ雫ちゃん！」

「じゃーなー！アッハッハッハッハッハッハッー！！」

俺の手を握りながら中々の速度で走る雫の笑い声がうるさい。

ってかいつの間にか大分部室から離れてる。

聞こえるか微妙だけど一応言っておくか……

「じゃーなー美咲ちゃん！また明日ー！！」

——また明日ー！

あつという間に離れた部室から、かすかに美咲ちゃんの返事が聞こえてきましたとき。

俺と妹の放課後（後書き）

何だか知らないけど、昨日は2011 11 11 でポッキーの日だったらしいね。

……自分はポッキー買わないからいいけど。

俺と妹の帰宅後（前書き）

この作品は作者の妄想をグダグダ書き連ねていくだけのモンです。
自分の気に入らんとこがある奴は戻るを押したほーがええんとちや
ういますか？

俺と妹の帰宅後

「よっしゃー着いたー!」

家に着いたと同時に雫がそう叫んだ。

———というか

「お前一体どうしたんだよ、何かテンションおかしくないか？」

俺と寝る事になってからずっとこんな調子なんだが……
そんなに嬉しいがる事なのか？

「いや別に膝枕だけでも嬉しいのにそれ以上に兄貴と一緒に寝れるのが嬉しいとか、そんな事はないんだからな！ホントだぞ!？」

何というあざといツンデレ。

だがこれを天然とするのが my pretty sister
の恐ろしい所である。

夜一緒に寝るっていうお願いの時も涙目上目遣いという高等テク
ニツクを使ってきたからな……まあそれは別にいい。

可愛い姿を見れてラッキーとしか思えないし。

あの後俺達兄妹はあつという間に家に着いた。

雫に手を掴まれた状態でずっと走っていったせいか手が痛い……
何度も離してくれて言ったのに何故か離してくれないし。

「兄貴、膝枕はいつしてくれるんだ？」

「あーそうだなー……」

今日は帰ってくるのが早かったし、晩御飯は昨日の肉じゃがの残りがある。

ご飯も冷凍してあるからそれを温めたらいいか……

ってあれ？やることがほとんど無いじゃん。

精々ほうれん草のおひたしを作る位か？それもすぐできる物だし。だったらほとんど（全くと言っていい）時間が掛らないし、今やっても大丈夫だな。

「今日は飯の準備もほとんどする事が無いし、今からでもいいぞー」
「マジで！？やった！」

「でも美咲ちゃんみたいに寝ちまうなよ？夜眠れなくなるからな」
「えー別に良いじゃん。どうせ兄貴が起こしてくれるんだろ？」

「お前なあ……だったら明日起こす時は水でも……いや、ベットが濡れるから水をぶっかけてやろうか？それならお前も一発で起きれるだろ」

「ううー分かったよ……寝ないようにするよー（どうせ今日は兄貴と一緒に寝れるんだからな……えへへ。兄貴の匂いと温もりに包まれて寝る……想像するだけで最高じゃねーか！）」

「分かったならよろしい」

さてとそれじゃ……って

「お前が俺の太腿の上に乗るって事は、俺は動けないんだよな？……
……だったら俺は何をしてればいいんだよ……」

「本でも読んでればいいんじゃないのか？」

「いや、あれは今日読み終えちゃったからな……」

読み終わったのは今日の放課後だけど、昨日一昨日に大分読み進めてたし、授業の合間の時間にも読んでたし。

晩飯の用意の必要がほとんどないから、1時間位は時間があるんだが……その間ずっと手持ち手持ち無沙汰でいるのか？

雫の学校生活は普段こいつから言ってくるし、本当にやる事が無い。

読んでた本の次の巻はまだ発売してないし。

「つかお前は俺の太腿に頭乗せてるだけで暇じゃないのか？ いや、そもそも1時間膝枕してるなんて事無いよな……？」

「えー別にあたしは兄貴の膝枕で1時間とか余裕だぜ？マジで」

……えー、マジで？

「俺の太腿が大変な事になりそうなんだが……」

人間の頭は結構重たいんですよ？

「なんだよ、兄貴はあたしと1時間も一緒にいるのは嫌なのか！？」

……いやなのかよお……（メソ）

「ちよ、おま！？」

何だこの既視感デジャヴは！？

朝にもこんなことあったじゃないですかーやだー！

……というかお前そんな泣き虫でしたっけ！？

「分かった、分かったから。1時間ぐらい大丈夫だよ、それに嫌なんて事もないさ。可愛い妹なんだから一緒にいるのが嫌なんて事は

無いさ」

「……うん、わかった。じゃあ膝枕して？話してる間に時間たっちゃったし」

「わかったよ、全くうちのお姫様は甘えん坊だなっ」と

「お姫様！？あたしにお姫様なんて似合わねーよ！……それに夜は一緒に寝るってのも忘れんじゃねーぞ！！」／／／／

だから大声を出すなんて……。

何だかまた雫のテンションがおかしくなってきたので、強引に頭を太腿に乗せてやる。

……これで大人しくなるかな？

「うわっ……あ……んむ……にゅ……（あ、兄貴……）」

お、大人しくなったな。

「……………」

あれ……なんか動かなくなったぞ？

「おーい雫さん？どうしたんだー？」

「……………ZZZZZZ」

「おーい……って寝てるじゃねえか！（ベシッ）」

ついさっき寝ないようにするって言ったばかりだろうが！

「う”っ……いてーな……なにすんだよお……」

「お前は何を寝てるんだっさっき寝ないようにするって言っただろっ！」

「そ、そんなの兄貴の膝枕が安心するのが悪いんじゃねーかつ！あ

たしは悪くねえ！あたしは悪くねえ！悪いのは全部兄貴の太腿だ！」

逆ギレですかー！？

「いやいや太腿が悪いって何だ！筋肉痛か何かか！？」

「いやその突っ込みはおかしいと思うんだけど……」

「大体聖なる焰の光みたいなキレ方すんじゃないよ、ってか何故知ってる？」

「え……兄貴がやってるのが面白そうだったから……それにアニメもやってたし……」

「……はあ、やめよう。何か論点がずれてきたし、無駄に疲れたわ……」

「そうだな……」

※この間ずっと膝枕状態です

そして、そこからはゆったりと時間がすぎて行った……お互いに会話はなかったけど決して悪い雰囲気ではなかったし、こんな時間を過ごすのも悪くはないだろう。

○

気が付くといつの間にか1時間経っていたようだ。

お互いに喋らず、眠った訳でもないのに1時間も経つとは……正直驚きだ。

「よし、それじゃあ時間だし晩飯の用意するか。雫、テーブル拭いて皿出してくれ」

「……ん、分かった」

さて、まずはほうれん草のおひたしを作るかね……

———兄妹とまったりとした時を過ごした、まる……いやまあ夜は一緒に寝るけど。

俺と妹の帰宅後（後書き）

ミ○トンミックスフルーツ味を炭酸水で割って飲むと美味しい。

なんで○ルトンかって？

……カ○ピスより安いからさ。

俺と妹の夜（前書き）

この作品は作者がノリと勢いでただただ妄想を書き書き殴っていくだけの物です。

「それでもok」と言う方はどうぞ宜しくお願いします。

俺と妹の夜

「それじゃあ雫、風呂の掃除をしてくれるか？俺は皿を洗うかな」

「分かった兄貴……風呂も一緒に入るか？」

「はいはい冗談はいいから行ってきなさい、それに女の子が男と風呂なんて駄目だろうが。夫婦でも無いのに」

「へへっ分かってるよ、行ってくるぜー（せっかく勇気を出して言ったのに……別に兄貴とならないんだけどな……）」

「まったく、一瞬ドキッとしちゃったじゃねえか……流石に風呂は駄目だろう。」

「……まあ一緒に寝るのも駄目だと思うが、今更止めようなんて言ったら涙目どころか本気泣きしそうだしなあ。」

「あの子もいつかは誰かの嫁に行っちゃうのかねえ……」

「お兄ちゃんは許しませんよっ！どこの馬の骨とも分らん男のものと行くだなんて！！」

まさに父親的思考である。

あの子は美少女だ。

綺麗な金髪を後ろで結び（ポニーテールって奴だな）、背も結構あっとおまけに胸もある。

街を歩けば10人中9人は振り向くだろう。残りの一人はホモな。本人は好きな男とかいないみたいだし、今のところは大丈夫だろうが……いつかはそんな時もあるのかなあ……。

「ま、そう簡単に妹はやらんがな」

うちの可愛い妹が欲しければ、まず俺を倒していくがいい。
これでも喧嘩は強いぞ？

……よし、皿洗い終了。

二人分の食器を洗うのなんてすぐ終わるしな。

——兄貴ー！風呂掃除終わったけどもうため始めんのかー！？

ん、あっちも終わったか。

んー風呂が沸く時間も考えればもうため始めたらいいかな？

「おー！スイッチ押しといってくれー！」

——分かったー！

さて、風呂を待ってる間に干してた洗濯物でも取り込むか。

○

「んー♪ んーんー♪」

鼻歌を歌いながら洗濯物を畳む。

普通雫くらいの年になれば父親や兄弟と一緒に選択されたりするのは嫌だと思うが、雫はそういうのを気にしない。

……流石に下着を畳むのは自分でやるが。

『〜♪お風呂が沸きました』

ん、どうやら風呂が沸いたようだ。

「おい雫ー！？風呂溜まったけどお前先に入るのかー！？」

「――兄貴が先に入っといってくれー！」

ふむ、どうやら学校の課題か何かでもやってるみたいだな。

「分かったー！俺が先に入っておくー！」

ちなみに俺はそういう課題が出た時は授業の後の休み時間（教室移動時間ともいうが）に進めて置いて、家ですぐに終わらせるようにしておく人だ。

家事もほとんど終わらせたし、風呂から上がったら残りの家事と一緒に終わらせよう。

「さて、入りますかー」



「えーっとここは……？」

晩飯を食い終わった後、あたしは二階の自分の部屋で今日の宿題（課題）をやっていた。

内容は数学の教科書にある問題をノートにやるのと、英語のプリントだ。

正直あたしはあんまり頭がよくない。

まあ授業で寝てばかりなせいなんだけど、元々頭がよくないからだ。

だからよく兄貴に勉強を教えてもらうんだけど……兄貴は数学と英語は全然できない。

だからこの二つは自分でやらないと駄目なんだけど……

「だー！駄目だ、よく分かんねー！」

くっそー……仕方ない、美咲が貸してくれたノート見るか……

あいつは頭がいいから、数学と英語は美咲によく教えてもらう。

……あいつは兄貴と逆で国語と社会が壊滅してるけど……。

「あー、美咲のノートわかりやすいな……あいつの方が教師向いてんじゃないか？」

美咲のノートを見ながらやったらすぐ終わっちまった。まだ英語が残ってるけど。

あいつはあたしに見せるの前提でノートを写すから注釈とかがついてて凄く分かりやすい。

今まで何度も教えてもらったから私の理解力を完全に把握されてるし。

———おーい雫ー！？風呂溜まったけどお前先に入るのかー！？

お、風呂か……まだ英語が残ってるし兄貴の後で良いかな？どうせすぐには終わらないし。

風呂あがってからまたやんの嫌だしな。

「兄貴が先に入っといってくれー！」

——分かったー！俺が先に入っておくー！

……さて、勉強の続きと行く前にあれを出しておかないとな……。



「ふう、良い湯であった……。」

あーさっぱりした……。やっぱり風呂はいいね、心も体も癒される。

「雫ー！風呂空いたぞー！？」

——分かったー！

……さて、残りの家事と課題を終わらすか。
どうせすぐ終わるけど。

「——よっし、終わった！」

あとはテレビでも見とくか。



『なんでやねん！それはおかしいやろ、なんでそんな位置にそれがくるんじゃー！』

「……つまり、最近の芸人はよろしくない……」

いや、こいつらがよろしくないだけか……？

まあつまらんしチャンネルを変え——

「あーさっぱりしたー！」

雫が風呂から上がったようだ。
パジャマ姿で入ってきた。

「あ、兄貴ー」

「ん、何だ？」

「寝ようぜー」

「はや！？」

いやいや俺はもうちょっとテレビを見て、そこからPCで二次小説でも見ようと思ってたんだが……。

「いいじゃねーか、さっさと寝ようぜ？別にベットに入ってからすぐ寝るわけじゃねーし（そんなすぐに寝ちまったら兄貴の匂いとか温もりが堪能出来ねーし……ってあたしは何考えてんだー！）」
／／／／

うお！何か真っ赤になって悶えだした！？

「おい、一体どうしたんだ……？」

「う、うううっさい！とつとと行くぞ！！」ガシッ

「ちょ、おい！そもそもどこで寝るんだよ！？」

「兄貴は布団で寝てるだろ？だから落ちる心配もないし、でかめの布団使ってるし兄貴の部屋で寝る！」

「ちょ、おい！別にそんな無理やり連れて行こうとしなくても……
って聞けよ！？」

……そういつて俺の手を掴み、また俺は無理やり連れて行かれてしまった。

俺と妹の夜（後書き）

さて、いつまでこの更新速度で行けるかね……。。

俺と妹の就寝（前書き）

この作品は作者がノリと勢いでただただ妄想を書き書き殴っていくだけの物です。

「そんな駄文で大丈夫か？」という問いかけに「大丈夫だ、問題無い」と返答のできる方はどうぞ宜しくお願いします。

俺と妹の就寝

「そおい！」ブンッ

「うわっぷ！」ボスッ

雫め、布団に俺を投げやがった……っていか何で布団が敷いてあるんだよ。

俺はちゃんと畳んでから襖の収納に片付けた筈だぞ……。

「兄貴が風呂に入ってる間にあたしが出しておいたのさ……、とう！」ボスッ

それはまた準備がよろしい事で……って飛び込んで来るな！？

「んあー兄貴いー……（ギュウ）」

「ちよ、くっ付くな！」

「いいじゃねーか、膝枕の時は全然くっ付けなかったんだからさあ……」

えー我慢してたって事ですかー、そうだったんですかー。

「え、まさかこの体勢で寝るなんて事無いよな！？」

うつ伏せの上に乗られても寝れる気がしないぞ！？

「んー、確かにこの体勢じゃ兄貴の顔も見えないしなー……」

「いや、それ以前に掛け布団かかって無いから。今の衝撃で全部横

に行ったから」

「あ、兄貴の上に乗った時すぐ掛けれるように半分に分けておいたのが駄目だったかー」

「俺の上に飛び込んでくるまでの流れは全部計画通りかよ！」

「……言っとくけど、今更別で寝ようってのは無しだからな？（むぎゅう）」

「うぐっ、キツイ、力、強い、からっ」

痛い痛い、締まるっ腕が回されてるわき腹が締まるっ

しかも息がし辛くてキツイ！

「あとくっついて寝るのが駄目なんてのも無しだからな！？（ぐぎぎ）」

「わ、分かつ、た、わ、かつた、からっ、いいか、げんに、はな、せっ！」

「分かったならいい」

「ぜえ…ぜえ…とりあえず一端布団から出て、布団を綺麗に敷き直すぞ」

今の鯖折のせいで（それから脱出しようとしたせい）布団がグチャグチャになっちゃった。

「仕方ねーな…：兄貴そっち持ってくれ」

「はいはい…：これでよし、と」

「じゃ、改めて一緒に寝よーぜっ」もぞっ

「分かったから少し落ち着けて…：」もぞもぞ

そして今度こそちゃんとした体勢で布団に入った。

……ってか

「やっぱ狭いじゃねえか……」

「ベットよりはいいじゃねーか」

「いや、普通の仰向けで体の三分の一が出ちまってんぞ」

「じゃあお互いが横向きに寝れば良いんじゃね？」

「あー、そうするか」もぞ

「な、あたしに背を向けるんじゃねーよ！」

「いやいや、どういうこっちゃ。お前が横向きにすればって言ったんじゃねーか」

「そうじゃなくてっ、あたしの方を向けてって言ってんだよ！」

え……

「マジで？」

「マ、ジ、で！」

そんな強調しなくても……

「いやでもそれじゃあ唯でさえ体がくっ付いてんのに、お互いに真正面なんか向いたら……」

だって今俺の背中に雫の顔（これは鼻か？）が付いてんだぞ！？

「いいから早く！さっさと、こっち、向けっ」ぐぐぐぐ……

「うお！？」グルン

無理やり体を回転させられた！？

「えへへえ…あにきい…」ぎゅっ

「ちょ、おい、雫…」

そんな正面から抱きつくな……

俺と雫は身長差が10cmほどある。

そこから雫が少し下にずれてるせいかな（多分雫が自分からずれたっぽい）、今雫の顔が俺の胸にうずめられている状態だ。

しかも雫は俺の背中に手を回しているから離れられないし、雫が俺の胸に顔を擦り付けているせいで色々辛い。

……何か腹の下あたりにとんでもなく柔らかい物が当たってるし……
……いかん！意識するな！妹に反応してしまっっては兄貴失格だ！！
……でも、こいつ良い匂いするな……。

「んにゃあ……あにき……あにきい……（兄貴の匂いがあ……んふふ、あにきのおいが……あー……、あにきあったかいよお……）スリスリスリ……

「く……（やばい、ずっとこの状態は拙いぞ……どうすれば……）」

「んー……ねえあにきー……」

ん？何だ、俺の方を見上げて……ってかまた上目遣いか。
暗がりだって言うのも相まって異常に可愛いんだが……。

「あ、ああ、なんだ？」

「あたま、なでて？」

なんか凄い幼児退行してるー！？

「わ、わわわわ分かった」なでなで……

ここは言う通りにしておかないと……

「んふー……、んー……ぎゅってして？」

くっまた上目遣いだと…!?!?
もうやめて!十夜のライフはもうゼロよ!!

……し、仕方ない。

ここでやらなければ幼児退行している雫の事だ、また涙目上目遣いでトドメを刺されるか、泣きながら鯖折かなんかをされる気がする……ってか絶対どちらかをされる!そんな未来が俺には見える!!

「ほ、ほら、ぎゅー……」

更に抱きしめながら頭を撫でてやればどうだ!?これならば勝てる筈だ!(何にだ)

「んにゃーんにゅう…はあ、おにいちちゃん…わたしいましあわせだよお…」ZZZZZZ

寝た…か…。

眠る間際のあの口調、自分を『わたし』と言ったのも、俺を『おにいちちゃん』といったのも……

「少しだけど、昔に戻れたんだな……」

俺も今夜は今まで以上にグッスリ眠れそうだ……

眠っている雫を右手で抱きしめ、左手で頭を撫でてやりながら、俺はそう思った……。

——
お休み、
雫。

俺と妹の就寝（後書き）

これは酷い。

元々酷いクオリティが更に落ちておりますぞ。

……こんな駄目な作者ですがどうかよろしくお願いします。

俺と妹の朝と過去（前書き）

後半はシリアス（笑）またはシリアルでござる。

……寧ろそれ以下の何かかもしれん。

▲ ▼ ▲ ▼ ▲ ↑ 回想

俺と妹の朝と過去

「んう…むにゅ…………あむっ」かぷっ

「うーん…んむむ…」

「んにゃー…んふー…はむっ」かぷっ

「ん？…………んー…」

「んちゅっ、ちゅー…………」かぷかぷかぷ……

「ぐっ…………んん？な…なんだ…………？」

何だか耳に違和感を覚えて目が覚めた。

「一体何だって…………あれ？」

何か前が見えないんだが…顔に何か当たってる？
柔らかくて良い匂いがして…………ってまさか！？

「雫の胸じゃねえか！？」ボソッ

小声で叫ぶという器用な真似をして完全に目が覚めた。
それによってやっと大体の状況を察する…………まだ前は見えないけど。

「あむっちゅっじゅるるー」

…………どうやら雫が俺の耳をしゃぶってるっぽい…………

「こいつ、寝ぼけてやがる…………」

おおかた飯を食べる夢でも見ているんだろう…………

「(ちゅぽんっ)…んあー兄貴いー…あにきいー…」

あれー？俺の夢？何で俺の夢を見ると耳をしゃぶる事になるんだよ…あれなの？俺が雫の為に料理を振舞ってる的な…いやでも完全に甘がみされてるしな…

「とりあえず起きるか…：よっと…おお！？」グイッ

起きようとしたら背中に戻された腕にこもる力が強くなった。しかも自分の足を俺の脚に絡めてきたせいで完全に動けない。…：せめて時間を確認したいんだが…。

「んあっあにき…だめえ…んふ」

何故か雫が嬌声をあげる…：耳をしゃぶりながら。

体を離すのは無理っぽいので、まずは雫が俺の耳をしゃぶるのをやめさせよう…：さっきから耳元を舐めたりされるせいでずっとペチャペチャ音が聞こえていて、頭がどうにかなりそう。

しかも時折雫が「あにきすきい…」だとか「あにきだめえ…」だとか嬌声をあげるせいで、俺の息子が暴走しそうでやばい。

妹に反応するなど許されない事だからな！

「よっと…む、いきなり離すのは無理か…：ならば」

雫の頭を下に、つまり俺の胸の所に来るように体をずらそう。

「よーしよし、良い子だ…：…」

あまり無理やりやろうとするとぐずりながら抵抗されるので、頭

を撫でやりながら頭をずらしていく。

———よし、上手く行った。

途中雫の口が俺の口と接触しそうになって焦ったけど、何とか回避に成功したぜ。

「さてさて時間はつと…まだ2時じゃねーか…」

まあ昨日は早くから寝たし、雫の耳捕食事件（ノリで命名）によって起こされたから仕方ないんだが、俺が起きるまでまだ2時間もある。

それまでどうするか……。

雫の頭を撫でてやりながらゆっくり考えよう

「んにゃー…おにいちゃぁん……」

……そうだな、雫が今のようにヤンキーっぽくなる前の事を考えよう。



———昔まだ小学生だった頃、雫は虐められていた。

特に理由があった訳では無い。

強いて理由をあげるとすれば、雫が物静かで自分を表に出す事が苦手な女の子だったからだろう。

しかもこういう時期の子供は、相手が大した抵抗をしなければ調子に乗って更に酷い事をする。

最初はたまに机にちよつとした落書きを書いたりするだけだったのが、靴や筆箱など、物を隠したりするようになり、それから悪化して面と向かった暴言になり、最終的には暴力を振るうに至った。

当時の俺も何度か雫を庇ったりしたんだが、妹への虐無くすまでの事はできなかった。

学年自体が違ったし、その頃の俺は喧嘩が強くなり、虐めのリーダーをしている悪ガキが空手をしているのもあって自分よりも一つ下の子供を倒す事が出来なかった。

だから俺は強くなろうと思った。

雫を守るような強い男になろうと思った。

でも時間が無い。

雫は今虐められている。

そのリーダーの周りには3人の取り巻きがいたし、そいつらは別に強いわけでは無いが、単純に4対1という数の差は子供にとって覆しがたい差だった。

———それでもやらなければならない。

勝てないとしても、毎日暗い顔をして学校に行く雫をこれ以上見たくなかったのだ。

せめて奴らに一泡吹かしてやりたかった。

前日のうちに消しておいた雫の机の落書きを見て、あいつらが放課後、また落書きをしようとした所に待ち伏せした。

何か策があった訳ではない。

俺はただあいつらに正面からぶつかっていった。

———結果、俺は奴らにボコボコにされた。

いや、それより危険だった。

奴らのリーダーに殴られて、反撃しようとした所を後ろに回り込んだ取り巻きに突き飛ばされたせいで、俺は教室の窓ガラスに腕を突っ込んだのだ。

ガラスは割れ、しかも俺の手首がガラス片で切れてしまった。

手首にできた何故か白い傷口から、真っ赤な血が染み出るように溢れ出し、床に滴り落ちて行ったあの光景は今でも思い出せる。

その光景を見た奴らは小さな悲鳴をあげて逃げて行った。

学校のガラスを割った事と、何より俺の手首から滴り落ち、床に溜まっていく真っ赤な血に恐怖したのだろう。

窓ガラスの割れた音を聞いたのだろう、向かいの校舎の一回にある職員室から何人かの教師が駆け付けてきた。

そして手首から血を流し、体も殴られてボロボロな俺を見て、唯の悪戯では無い事に気付いたのだろう。

俺を一先ず保健室に連れて行き、事情を聞いてきた。

勿論俺は先生達に事情を話した。

……今まで何もしてこなかった教師も、事態を放置したせいで軽傷とは言い難い怪我人を出したとあっては動かずにはいられない。

直ちに虐めの調査が進められ、虐めをしていた4人は別の学校に転校していった。

手首の傷は10針縫う怪我だった。

幸い静脈を傷つけていなかった為命には何の問題の無いものだったが、その時の医者曰く「後数センチ横を傷つけていたら君は死んでいたかもしれないね。結構深く切ってるし、もし実際にずれていたら噴水みたいに血が出てきただろうねー」だそうだ……軽い口調で随分恐ろしい事を言われて、酷く背筋が冷たくなった事を覚えている。

勿論この事は雫の耳にも入った。

自分のせいで兄が下手をすれば命に関わるような怪我をしてしまったと思っただろう……あの子は酷く自分を攻めた。

……正直、その頃の自分が許せない。

妹を助けようとして、結局あの子を悲しませてしまった事に酷く自分の弱さを実感させられた。

雫も自分の虐められた原因が自分の弱さだと考え付き、口調や態度を変えた。

あの子にとっては、今のヤンキーの様な態度が強い物の姿だったのだろう。

子供の頭ではその程度が限界だ。

俺はもっと強い男になろうとして色んな格闘技に手を出し、妹を守りたいという俺の意思を知った両親も応援してくれた……何故か雫もボクシングをやり始めたのは誤算だったが……。

こうして俺は喧嘩に強くなり、雫は晴れてヤンキーの道を歩み始めたという事だ。

……まあヤンキーと言っても、喝上げとかはしないし、どっちかと言うとただ単に気が強くなって暴力を振るうようになっただけだし、しかも俺には甘えてきたりするので、可愛い妹であることには変わり無いんだがな。

俺と妹の朝と過去（後書き）

実は左手首の怪我は、実際に私が負った傷だったりする。

……原因は自業自得だけどね……。

そろそろ毎日投稿は出来なくなりそうですねー……地味に執筆時間が取れなくなって来ましてね……。

※指摘された誤字修正

俺と朝の日課の鍛練（前書き）

まさかまたもや不慣れな描写をする羽目になろうとは……

戦闘描写なんぞ出来る筈があるまい……。

俺と朝の日課の鍛練

さて、過去の事はもういいだろう。

今は俺も雫も元気にやってる…それで充分だ。

時間もそろそろトレーニングに行く時間が迫ってきたみたいだし、そろそろ布団から出るとしよう。

「んー…あにきい…」スリスリ

…：まずは俺に頼ずりするのに夢中なこいつを何とかせんとな…
…。

という事で、さつき雫の頭をずらした要領で行くとしよう。

頭を撫でながら少しずつ体をずらし…その隙間にいつの間にか布団から出ている枕を…入れ、るっ！

「…よし、後は体を抜けば…」

スルスル…つと…よし、行けた。

「ううーあにきい…いかないでくれよ…」

え？起きてないよね…？寝言にしてはタイミングが…、もしかして俺の体と枕の感触の違いで気付いてんのかな…。

何か枕を抱きしめる力が凄い事になってるし。

さつきまで俺に込めてた力を『ぎゅ』で表すのなら、今は『グギギ…』って感じた。

人間なら骨が軋む音を聞く事になるだろう。

「ごめんな雫、トレーニング行ってくるからな」
「んー…………」ぎゅっ

また少しの間頭を撫で続けながらそう言うと、どうやら少し安心したようだ。

さっさと行ってさっさと終わらせるとしよう。

「行ってきまーす」

返事の無い事が分かっていても、そう呼びかけてから家を出た。

○

「はっはっはっはっはっは……………」

規則正しい呼吸と規則正しいペースを心がけて走り続ける。

まず最初にするのは体力作りだ。

何事も体力が無ければやってられないというのは正しいと思うし、
そのためにはやっぱりランニングが一番だろう。

足腰も鍛えられるし。

「あらゝ十夜君じゃない。おはよゝ」

「あ、静音さんおはようございます」

この人は響ひびき静音しずねさん。

俺がランニングしているようにこの人も毎朝散歩している人で、
何故こんな朝早くから散歩しているのか聞いたら「十夜君に会う為
に、時間を合わせているのよ」と、はぐらかされてしまった。

歳は分からないが（女性に年齢を聞くのは失礼らしいので聞いた事が無い）恐らく20代前半だと思われるかなりの美人さんだ。

「今日もランニング？ 関心ね」

「まあ日課ですからね……っていうかそれ毎日言うんですね……」

「あらあら、そうだったかしらでも私は本当にそう思ってるのよ？ 十夜君みたいな良い子はあるまいないから」

「いやいや俺より出来た人間なんていくらでもいるでしょうよ」

「もー謙遜しちゃって……河原で別のトレーニングもしてるんでしょう？ 本当、良い男だと思うわ」

「静音さんみたいな美人さんにそう言ってもらえとうれしいですね……というか、何で河原でトレーニングしてる事知ってるんですか？ 見せた事無いと思うんですけど……」

「あらあら……、ひ・み・つ（はあと）」

相変わらず読めない人だな……

「んー…何か十夜君から女の子の匂いがするわね」

なんですと？

「なんですと？」

口に出た。

「匂うわよー若くて可愛い女の子の匂いが」

まあ今日は妹と密着して寝てましたからね……とは言えない。

「もしかして彼女？ 彼女ができたの？ ねえどうなのかしら、ねえ

」？

あれー？ 何だかいつものほんわりオーラが無くなったぞー？

……え？ 本当に何が起こった。

本気で怖いんだが。

「いや、多分妹の匂いじゃないかと…」

「ふーん？ 今まではそんなにしなかったのに？」

「えーとそれは…」

「それは？」

「それh『プルルルルルッ』うお！？…すいません、河原でのトレーニングに移行しますんで！」 ダッ

危ねー！ ケータイのタイマーに救われたー！！

とりあえず全力でその場を去った。

「…あらあら、逃げられちゃったわ。それにしても慌てちゃって可愛いわね…：：：今度はちゃんと説明してもらわよ？…：：：んふふっ」

やばい、背筋にゾクッと来た…前にもこんな事あったよな…：：：。

○

河原に到着した。

とりあえずさっきあった事は忘れて、トレーニングを始めようと思う。

まあトレーニングと言っても、唯の筋トレが主なんだがな。

「295…296…297…298…298…299…300…つと」

時間が有り余っているわけではないので、基本的な筋トレを各300回ずつするだけだ。

……こんな事を毎朝しているのは俺の周りには他にいないので、この回数が多いのか少ないのか良く分からないんだが……どうなんだろうか。

「さて、次だな」

これ以上回数を増やすと学校生活に支障をきたすんだよね……授業中に寝やすくなったりとか。

「まあ自分的にはこれで良いと思ってるし、これでやっていけるからいいだろ」

というかこれより早く起きるのは流石に無理だしな……。

「297…298…299…300つと…よし、筋トレ終わり！」

筋トレが終わったら、実際の戦闘の練習をする。

勿論相手がいるわけではないので、仮想敵を想像してするだけだ。実際に戦った不良たちを相手にした時の事想定して動く。

今回の敵は鉄パイプ持ち二人、ナイフ一人、素手一人だ。

一人いる素手はボクシングでもしているのかフットワークが素早く、拳のキレがいい。

鉄パイプ持ちを不良AとB、ナイフ持ちがCでボクシング経験者をDする。

「まずは殺傷力の高い奴を……と」

不良Cが斬りかかってきたのでナイフをかわし、すれ違い様にナイフを持った手を掴む。

その手を上に捻り上げてそいつの体の後ろに回り込み、不良Aの方へ突き飛ばしてやる。

勿論その時にナイフを奪っておくのも忘れない。

その隙に不良Bが殴りかかって来たので、今度はその鉄パイプをかわして相手の懐に潜り込む。

後は相手の鳩尾みぞおちにその勢いで膝をお見舞いしてやり、その時に下がってくる顎にアッパーカット。

まあ良くあるコンボだな。

これで1人は完全ノックアウト。

少し息を整えていると不良Dが素早いフットワークで懐に潜り込んでこようとしてくるので、あえてこちらから距離を詰めてやる。

距離を取ろうと思うていたのだろう、一瞬相手が怯むのでその隙にこちらが懐に潜り込み、苦し紛れに放ってくるパンチをかわし、その腕を掴んで背負い投げを食らわせてやった。

ただそれだけでは終わらないので、倒れた相手の頭にお見舞いしてやる。これで頭を揺らされて二人目ノックアウトだ。

そこでやっと最初に投げられた不良Cと、Cとぶつかって倒れた不良Aが復帰してきた。

……正直ここからは余裕だ。

一番の実力者だった不良Dが余裕で倒せた以上、唯の喧嘩殺法しかできない二人なんて今更相手にもならない。

殴りかかってきた鉄パイプを持ちの顔面をカウンターでぶん殴ってやり、もんどりうって倒れこむと同時にその鉄パイプを奪ってや

る。

そして後ろから突進してきた、今は素手の不良Cの腹に野球のボールの如く鉄パイプでフルスイング……突進してきた勢いもあってか『ドグシャアッ』と派手な音を立てて地面に倒れた。

不良Cはそれで気絶したので、何とか起きあがってきた不良Aの顔面に勢いをつけた張り手をお見舞いしてやる。

——踏ん張る事もできない不良Aは、3mほど吹っ飛んで気絶した。

「ふう、こんなもんかな」

ちなみにこれは実際にあった戦闘だ……そんな大したものじゃないから喧嘩かな？

まあ俺がそこそこ強いという事が分かってくれたと思う。

まあ暴力何て振るわないに越したことがないんだが身を守るためには必要な事でもあるだろう。

妹の雫もそこの不良には負けないレベルの実力があるが、それでも何かあった時俺自身の手であの子を守るように鍛えてきた。

……もし本当にそんな場面が来た時、俺はあの子を守れるだろうか。

「ま、守れる守れないじゃなくて……守るんだがな」

さて、早く家に帰ってシャワーを浴びるとしよう。

俺と朝の日課の鍛練（後書き）

前回言ったばかりなのですが、何やら本気で執筆時間が取れなくな
ってまいりましたので、投稿間隔が開きそうです。すみません。
休日を作ったストックが無くなるまでは今まで通り毎日更新が続く
でしょうが……それも少ないですしね……多分2話分ほどでし
ょうか……。

俺と妹のいつもの(?)朝(前書き)

デデデデーン…デデデデーンアバババガガガガ…オデ、ガ
ンバル!

……ガンバル?イヤ、ガンバレタ……?

俺と妹のいつもの(?)朝

ジャー……

「やっぱり汗をかいた後のシャワーは最高だな」

まあ朝って事もあって、湯冷めに気を付けないといけないけど。

「……ふう、さっぱりした。今日も一日頑張りますか!」

風呂場からでて、出しておいた制服を着る。

ウチの学校の制服は私立なのでウチオリジナルの制服であり、俺含む生徒の多くが気に入っている物である。

女子と男子の制服には結構な違いがあり、男子の制服のデザインは学長が、女子の制服のデザインは教頭が担当して作ったとか。

男子の制服は格好良い系で、女子の制服は可愛いと結構な人気があり、デザインの方向性にもある程度の違いがある。

男子が黒と白の二色だけで、シャープさや格好よさを考えて作られているのに対し、女子は黒を基本とした赤と白という落ち着いた、しかし可憐さが引き立つようなデザインになっている。

まあこの説明を聞いただけではそんなにおかしい部分はないと思うだろう。

しかし今のデザインに決定する前の……つまりデザインを決める会議をした時には、かなりの論争がまき起ったというのは、この学校では有名な話だったりする。

どういう事だか知らないが、学長と教頭の作ろうとしたデザインが派手すぎて、学校の制服として機能するような代物ではなかったとか。

学長は本来もっとカッコいい物を作りたくて、教頭はもっと派手な物が良かったようで、当時の論争を知る学年主任の話を聞く限りではそれはもう酷い物だったそうだ。

実際にどんなデザインだったのかは知らないが、教頭曰く「二人の作ってきたデザインはそれはもう酷かった。学長のはコスプレにしか見えなかったし、教頭のはアイドルでも着るようなフリフリの付きまかった謎のドレス(?)」ってかんじだった。二人も中々譲らないし、正直今のまともなデザインになったのが奇跡だよ」…と言う事らしい。

ちよっと見てみたいかもしれん。

「よし、洗濯終了、次は朝飯の用意だな」

ふつ、実は制服の事を考えている間、洗濯物を洗濯機に入れて起動、洗濯が終わったら大まかの皺をとってからベランダに干す。

という事を流れるような手際で行ってきたのだ。

……やっぱ俺主婦だわ……。

「えーと…昨日は和食セットだから、今日は洋食セットか…」

まずはスクランブルエッグから。

ボウルに卵を割り、そこに塩コショウ、牛乳等をを加える。

それをフライパンに流し込み、そこに一口サイズに千切ったチーズを加える。

雫はこのチーズ入りスクランブルエッグがお気に入りだからだ。

ある程度固まってきたら火を弱め、軽くかき混ぜながらゆっくり焼いていく。

さて、スクランブルエッグが出来たので今度はサラダ作りだ。

といっても手の込んだものではなく、レタスを手で食べやすい大きさに千切り、いくつか作ってある茹で卵を半分に切ってレタスの上に並べる。更にシーチキンを上置いて市販のドレッシングを掛ければそれで終わりだ。実に簡単である。

まあここまで出来れば後は食パンを焼くだけなので、焼く前に雫を起こしてこよう……。どうせすぐには起きてこないだろうし。

「全く、どうしてあいつは俺を起こす時以外あんなに寝覚めが悪いんだか……」

昨日のように俺を起こす時は、俺が朝の鍛練をする朝4時なんて時間に起きてきたのになあ…。

それなら普通の時間にも自分で起きれるだろうに……。

一度、「何でお前は普段起こしてもらわないといけないのに、俺を起こす時はそんな朝早くに起きられるんだ？」と聞いた時は「兄貴のためならいくらでも頑張れるんだよ！……それに、兄貴の寝顔も見れるし…」と兄としては嬉しい返答が返ってきた（↑後半は聞こえていない）

まあつまり、俺の為には頑張れるけど自分の事になると面倒くさくなるという事だろう。

あまり良い事ではないが、しばらくこの状態でやっていこうと思う……それに、雫の寝顔は可愛いし。

「そんなことを考えてても仕方ない……起こしに行くか……」

○

はい、それでは可愛い可愛い妹の部屋へやってきました！

……いや、今日は俺の部屋だけだね……。
とりあえず

ガラッ

音が『ガチャッ』ではないのは、俺の部屋の扉が横開きだからだ。
……別にどうでもいいか。

「スウー…スウー……んー（モゾッ）」

「やっぱり爆睡してるな……」

しかも俺が滑り込ませた枕に顔をうずめて、たまに深呼吸しているようだが…、寝相にしては意味が分からん…。

まあとりあえず起こすか

「おーい雫？ 朝飯が出来たから起きろ！」

「……………いやぁ」

寝言で拒否…だと…？ 上等ではないか……。

「いいから起きろ！ 学校遅れても知らんぞおい！ 唯でさえ成績が悪いのに、これ以上成績を下げたら留年に繋がりがねんぞ！」

「うあー…うぐう…（モゾモゾッ）」

ん？ 後一息っばいな。

「早く起きないと置いて行っちゃまうぞコラァ！」（ズビシッ）

後頭部にチョップをかましてやる。
流石にこれで目は覚める筈だ……。

「あいたあ……あに、き？　うう……今のは夢だったのか……？」

「何の事が知らんが、とっとと起きなさい。飯が出来たぞ？」

…
「どうか何故そんな大事な物みたいに枕を抱きしめているんだ？」

「ほら、枕を離しなさい。布団片付けるから」

「え？ やだあ……」

え
ー
・
・
・
・
・
・

「何故に？」

「だって…その…えっと…うぐう（兄貴の匂いにするから…何て言えねーよ!）」

だから何でそんなに大事そうに抱きしめてるんだよ…何か抱きしめる力強くなったし…。

「さっさと離せて……じゃあお前の部屋まで抱っこして運んでやるってのはどうだ？」

理由は分らんがこう言えばちゃんと起きてくれるし。（普段は雫が着替えてから一階に運ぶ）

まあこの手を使うのは月に1度使うかどうかで位だな。

今日はすでに俺の部屋（一階）で寝ていたから、一度上の雪の部屋に連れて行かないといけない。

着替えは雫の部屋だからな。当たり前だけど。

「うー…、嘘じゃないよな？」

「ああ、嘘じゃねーよ。……と言うかお前、昨日一緒に寝た事とか、今の抱っこで言う事聞く事とか、そんなに甘えん坊だったっけ？」

いや、甘えん坊なのは昔からだったが……こんなに露骨では無かったと思うんだが……。

「な!？ う、うつせーよ! 兄貴には関係ねーだろ!？」

「いやいやお前が甘える対象俺だから。どこにも無関係って言える要素ねーから」

「うぐぐぐ……兄貴はやっぱり甘えられるのって嫌か……?」

何を言うかと思ったらバカな事を…

「可愛い妹に甘えられるんだ。嫌なことなどあるものか、寧ろ嬉し
いぐらいだよ。……いつまで甘えてくれるのか分からんがな……（
ボソッ）」

「そ、そうか…えへへ、なら良いだろ? ほら、早く抱っこしてく
れよ! 嘘じゃねーんだろ?」

「はいはい、お嬢様は甘えん坊ですね」ヒョイツ

………全く、本当にいつまで甘えてくれるんだろうな。

俺と妹のいつもの(?)朝(後書き)

ガンバ…れない……俺頑張ったよ…。
もう一話分くらいストックがあるぜよ。

俺と妹の通学風景（前書き）

ストック尽きた……

俺と妹の通学風景

「————つと、着いたぞ。着替えたらすぐに降りてこいよ？
パン焼いとくからな？」

「分かったの。焦がすんじゃないぞ？」

「ふん、この我を誰だと思っているのだ雑種？ この程度の事、王
たる我が片手でも成して見せよう」

「いやいや：食パン焼くのには王は関係ねーだろ：っていうか誰でも
片手で出来る事じゃねーか：」

「いやー何だかあのキャラ嫌いになれなくてな……」

「あたしはやっぱり騎士王の女の子かなあ……」

「そういうやお前と同じ金髪だもんなー：って、俺の好きな英雄王だ
って金髪じゃねえか」

「いや、英雄王はあの天上天下唯我独尊を地で行ってるのが良いん
じゃねえか」

「いや兄貴、天上天下唯我独尊ってさ、自分が最も偉いって意味じ
ゃねーぞ？」

え？ マジで？ …いやいやそれは無いだろ……

「そんな訳無いだろ。天上天下（ry って自分が一番偉いって考
えを持って、傍若無人な行いをする奴の事なんだろ？」

「いや、それは間違ってるんだって！」

「それ誰から聞いたんだ？」

「美咲」

む、美咲ちゃんか：合って無いとは言い切れんな……

「でもそれが合ってるかは分からないんだろ？」

「あたしもそう思ったからパソコンで調べただけど…Wikiでは違うって書いてあったぞ？」

むむ…それは…むう

「そう…なのか…：知らなかった…：…」

「まー他の奴に恥ずかしい所見せる前に分かって良かったんじゃないか？」

「まあ、そう思っておくか…」

「じゃあ疑問も解消したし、あたしは着替えるからな」

「おう、じゃあパン焼くとするかー」

ボタン

背後でドアが閉まる音を聞きながら、俺はリビングへ向かった。

○

「さて、それじゃーいただきます」

「いただきますーす」

ガツガツ アッアニキソレアタシンダゾ！

イヤコレオレンダカラ！ オレノサラニノツテタカラ！？

というわけで朝食終了。

まあただひたすら食ってただけだしね。

○

「————さて、それじゃあ出発しますか」

「今日はちゃんと余裕持つて行けるんだな」

「昨日はお前先に行っちゃったからな……」

「いやいや、あれは兄貴が考え事してたせいで遅れたからだろ？

あたしは悪くねーよ」

ぐっ言い返せない！

「……じゃあ、行ってきました……」

「行ってきました」

俺たちがいなくなれば、誰も返事をする事は無い。

それでも長年やってきた習慣だから、どうしても呼びかけはしないよね。

○

テクテクテク…

テクテクテクテク……

テクテクテクテクテクテク……

話題が無い…。

流石にこのままずっと無言のままってのは嫌だな……。

「雫よ。可愛い我が妹よ」

「かわっ！？」　…ゴホンッんっ…何だよ」

「話題が無い。お前の方は何かあるか？」

「えー…そうだなー…、別に何かある訳じゃないけどさ、部活の事でも話すか？」

「部活の話し？　それってこの前しただろう。結局現状維持ーみたいな感じでさ」

「いやまあそうなんだけどよ…やっぱり部員が3人だけってのは少ないかなーってさ！　アハハ…。（兄貴と美咲を2人きりにするのが嫌だなんて言えないし…やっぱこの言い方だと違和感あるかな…）」

「まあお前がそう思ったんならいいさ——そうだな、俺の友人で、今部活に入って無い奴がいるんだけどな？　そいつは性格も悪くは無いし、そいつを部活に入れるってのはどうだろう」

ちなみに『そいつ』ってのは聡里さとりの奴の事だ。

あいつは護身術部があんなにグダグダだって事も知らないから今まで入るとは言ってはこなかったけど、それでも何度か入ったような顔をしていた。たぶん自分の運動神経的に無理だと思ってたんだろう。

「…そいつはあたしの事知ってんのか？」

「ああ、俺の妹も入ってるって言った時、『君の妹…ああ1年のヤンキーみたいな娘だね？　僕だって知ってるよ。ある意味有名人だし』って言ってたし、知ってるんじゃないか？」

「あたしの悪名を知ってて入ってくるのかよ」

「別に大丈夫だろ。お前の評判は最近良くなってきたし、そもそもあいつは他人から聞いた評価で人を嫌うような奴じゃないしな。」

「そうか…だったら、今日は体験入部って事で来てもらって、それ

から入部するか様子を見るか……」

「それが良いな。大丈夫だとは思うけど」

どうせ聡里の事だ、『へえ、いい部活じゃないか。グダグダ時間を潰すだけなんて僕にとってはいいい部活だよ』みたいな事を言うに違いない……。

「これで兄貴の言う奴が入部したら、やっと『同好会』がとれて、『護身術部』になるわけだな！」

「そうだなー……ってか、今まで『護身術同好会』だったんだな……」

「やっぱりダサイよなー……何かダサイよなー……」

「ま、申請もあるから正確に『部』になるのは明日だろうけど」

「ってかそいつが入部するかも分からないのに、何で兄貴はもう決定みたいに言えるんだ？」

「俺はあいつを信賴してるんだよ」

「ふーん……そうか……（女だったら注意するべきだけど……兄貴は『僕』って言ってたから男だろうし、大丈夫だな）」

「お、話してたら学校に着いたぞ。やっぱり無言より何か話してた方が早く着いた気がするな」

「んー……（でも今まで私と美咲、兄貴の3人でやってきたんだしな……どうなるかなあ……）」

ん？ 雫の奴何か考えてるのか？ まあいいか……。

さて、今日は余裕があるし、HRが始まるまでの時間で聡里に話をするとしますかね。

俺と妹の通学風景（後書き）

明日は更新できないと思われる。たぶん。

俺と聡里と部活勧誘（前書き）

毎日更新終了のお知らせ

今日は悪夢を見た。怖い。

俺と聡里と部活勧誘

「何だって？ 僕に部活に入れだなんて…本気かい？」

「いやいや、別に入れとまでは言っただろ。ただお前なら良いかなって思っただけさ」

「言っても何も君が入っている部活は護身術部だろう？ 僕の運動神経じゃ出来っこないじゃないか」

教室に着いた俺は早速聡里さとりを部活に勧誘しようと話している。

まあまずは護身術部の実態とかを話すしかないな……。

「その事なんだが…実はな…」

「？」

「実は…護身術部ってのはあくまで部活を作るための言い分でしか無くてな？ 本当はただ単に俺と妹、妹の友人が集まってグダグダ喋ったりしてるだけなんだよ……」

「え？ でも君は凄い強いじゃないか。あの实力は部活で培ったものじゃないのかい？」

「そのトレーニングは毎朝4時にやってるんだよ。護身術部にはそもそも道場すら無いからな」

「そう…なのか…。———だったら何で今まで僕を誘ってくれなかったんだい？ 酷いじゃないか。僕と君の仲なのに……」

「あー…、それは悪かった。でも俺の妹が知らない人間を入れたがらなくてな……」

「ふーん…それで、どうして今になって部員を増やす気になったんだい？」

「それは俺にも分からない。少し前に『部員を増やさないのか』って聞いた時には、『今のままで良い』って言ってたんだがな」

「ん？ 君が部長じゃないのかい？ さっき君の言った部員の中では君が2年では二人とも1年だろう？」

「そもそも護身術部を作ったのは俺の妹なんだよ。そんでもって部長も妹なわけ」

「ふむ……（まさか護身術部の実態がそんな物だったとは……と言う事は僕が入部しても何ら問題は無く、放課後も十夜と一緒にいられるという事なのかな？ 確か話を聞いた限りでは十夜の妹は中々のブラコンだって話だし……これは僕が十夜を奪い取るチャンスが来たって事だね？ フッフ……）」

なんだか思っていたよりも考える時間が長いな……。
もっと早めに答えを出すと思ってたんだが……。

「あー……それで、答えはでたか？ 俺は入部して欲しいんだが……」

「っ！……君は僕に入部したいのかい？」

「そりゃそうだろう。お前なら何にも問題無いし、3人だけってのも少し寂しく感じてきてな？ それで新しく部員を増やすならお前しかいないと思ったんだよ」

「そ、そうかい……（十夜は僕に入って欲しいんだ……フッフ嬉しいなあ……これは絶対に入らないとね。そもそも入らないなんて選択は元々無かったんだけどね／＼／）」

「で？ 結論は？」

「勿論入部させてもらおうよ————あ、そうだ。もう一人の……えっと、君の妹さんの友人だって言う子の事を教えてくれるかい？ 妹さんの方は君から結構聞いてるけどさ、そっちの方はあんまり知らないしね」

そう言えば美咲ちゃんの事はあまり話題に出さなかったつけ。
まあ聡里とは何の関係も無かったしなあ……。

「ああ。その娘の名前は美咲ちゃんって言ってn「ほーらお前ら席につけー。HR始めんぞー」…あー、また昼休みに話すか」

授業の間の時間は教室移動とかで話をする暇があんまり無いし。

「仕方ないね…（美咲…ね、女の子なのか。その娘も十夜に好意を抱いてるんだろうね…）」

「じゃ、また後でな」

「うん。また後で」

こうして俺は聡里と別れた——いやまあ同じクラスだけど。

○

キンコンカンコン……

「よし、やっと飯の時間だ……」

「さあ十夜、さっきの話の続きをしようじゃないか」

随分来るのが早いな…チャイムもまだ鳴り始めたばかりなのに。そんなに美咲ちゃんの事を知りたいのかね？

俺たちはお互いに向き合うように椅子に座り（聡里は無人になった机と椅子を借りて）弁当を出した。

「あ、また卵焼きいるか？」

「勿論貰うさ。…君の弁当には必ず卵焼きが入っているんだね」

「まあ場所を埋められるしなー。それに、お前にも毎日あげるわけ

だし」

「え？ それってもしかして…僕の為に作ってきてるって事かい！？」

「別にそれだけってわけじゃないさ。ただ、理由の一つではあるってだけだよ」

「フフ…そうか…僕の為に作ってるって部分もあるんだ…」（これは嬉しい事を聞いたなあ…卵焼きもいつもより美味しく感じる…フツ）

何か凄い嬉しそうだな…いつも無表情に近い顔がここまで変わるとは…

「聡里ってさ」

「ん？ なんだい？」

「笑顔も可愛いのに、どうしていつも無表情なんだ？ そっちも可愛いと思うけど…笑顔の方が可愛いと思うぞ？」

「っ！？ な、ななな…何を言うんだ！ ぼ、僕は可愛くなんて…」

「いやいや十分可愛いだろう常識的に考えて」

「まっまた可愛いって言って…：そ、そうじゃなくて、美咲って娘の話をするんだろう！ 僕の事なんていいから早くその娘の話をしてくれよ！！」

えー…、まあ聡里自身がそう言うなら仕方ないか…これ以上言っても聞いてくれなさそうだし…。

「分かった分かった。えーつと美咲ちゃんはな？ 俺の後輩で雫の友人…っていうか親友で、荒っぽい言動のせいで浮いてた雫をクラスに溶け込ませてくれた娘なんだよ。」

「雫って言うのは君の妹の名前だったね…最近彼女の悪評を聞か

くなったのはその娘のおかげって事かい？」

「ああ。ホントに良い娘なんだよ…雫も良い友人を持ったなあ……」

「ふむふむ……それで？ その娘は部活で何をしているんだい？」

「別に何をしてるっていうか、唯喋っているだけだけど…あ、昨日は美咲ちゃんがさ、何故か俺に膝枕してくれて言うからしてあげたんだけど…眠たかったんだな！。膝枕したらすぐに寝ちゃったんだよ」

あの時の寝顔可愛かったなー

「なん…だって…？」

ん？ 何か聡里が凄い驚いてる…どした？

「何を…何をしてるんだ君は！」

「うお！ いきなりどうした!？」

突然叫ぶなんてお前は雫か！

「もしかして君は、その美咲という娘と付き合っているのかい…？」

「え、いや別に付き合っていないぞ？ とうか膝枕は家で雫にしましたし…」

「妹にも…？ もしかして君は僕が言ったら、僕にも膝枕してくれるのかい？」

ブルータス、お前もか。

お前も膝枕か。

俺の太腿で寝る事はそんなに楽しい事なのか…？

「ああ、楽しい。とても楽しいよ。だから僕にも膝枕をしてくれ」

「ナチュラルに心を読むな…、まあ別に膝枕は良いけど…」
「約束だよ？　嘘だったら…フッフッ」

キヤーツまた背筋がアツ！

…この展開、何か覚えがあるぜ…。

「じゃあこれで話は終わり。弁当を食べよう？　話しに集中して
てあまり食べれて無いからね」

「ん、そうだな。時間もあまり余裕ないし、食べる方に集中します
か…」

—————こうして昼休みは過ぎていった。

しかし膝枕はどこでやるんだ？

まさか…部室、じゃないよな…？

俺と聡里と部活勧誘（後書き）

とりあえず一日置きの更新になるかな？

聡里と部員の顔合わせ（前書き）

危なかったぜ…あと少しで親知らずを抜かなければならなかった…。

まあこれ以上伸びてきたらどっち道抜かなきゃ駄目だろうけどなー…。

聡里と部員の顔合わせ

「こいつが俺が言ってた、今日から新しく部員になる聡里だ。良い奴だし皆仲よくしてくれよ?」

「初めまして。今十夜が紹介してくれたけど、明石聡里だよ。これからよろしくね?」

今は聡里と話をした時から大分時間が過ぎて、聡里と皆の顔合わせをしている。

はてさて、我らが部長殿はどんな反応を…あれ? 何か俯いて震えてるんだが……。

「おい、兄貴…」

やっと喋ったかと思えば何か声が一段低くなってる!?
これは刺激しない方が良くかもしれん……。

「何だ我が妹よ」

「話が違うじゃねーか……」

「え? 何の事だ?」

「聡里って奴は男じゃねーのかよ!!」

「いやいや、誰も男だなんて言ってるねーよ!」

勝手に勘違いして怒るんじゃない!

「でも一人称が“僕”なんだったら普通は男だと思うだろ!?!」

まあそりゃそうだが……

「俺は一言も“男”だなんて言って無いんだがな……」

「な！？　ぐぬぬ……（チクショー！　あたしのバカ！　ちゃんと性別を聞いておけばよかった！……いや、でもまだこの女が兄貴を好いてるって決まった訳じゃないし……後で理由を付けて聞くしかないか……？）」

今度は黙って何かを考え出した……忙しい奴だな……。

「あの、十夜先輩？　新入部員ってなんの事でしょうか……？」

え？

「美咲ちゃんは雫の奴から聞いて無いのか？」

「ええ、雫ちゃんからは何も聞いていませんけど……」

おいおい……。

美咲ちゃんも部の一員だったのに何で言って無いんだよ……。

まさか忘れてた？　でも今日出た話だし忘れるような物でも無いと思うんだがな……。

「おい雫、何で美咲ちゃんに説明してな……あれ？　雫の奴はどこ行った？　って聡里の奴もいないじゃねーか」

一体どうしたんだ二人とも……？



「それで、あんたは兄貴の事どう思ってんだ？」

今、あたしは聡里って奴と一緒に部室がある校舎とは別の校舎にある空き教室にいる。

理由はこいつが兄貴に対してどういう感情を持ってるか聞き出すためだ。

これだけ部室が離れていたら話を聞かれる可能性もないしな。鍵も掛けたし。

「どう…とは？ 何の事か僕には分からないんだけど。もう一人の子はそもそも僕が新しく入る事すら知らなかったみたいだけど、あれはどういう事なんだい？」

「うっ、あれは……」

やべえ、美咲があたしのいない時兄貴にくっ付いたりしないように、新しく部員を入れるなんて言えねーしな……。

美咲の奴に『新入部員を入れる』なんて言ったら理由をしつこく聞かれるだろうし、そのための建前を考えてたらいつの間にか放課後だったんだけど…美咲には悪い事して…っていやいや！ あれはあたしがいない隙に、兄貴に膝枕なんてしてもらった美咲が悪いんだ！ 私は悪くない！！

「ねえ考え事の最中で悪いんだけど、結局『どう思ってるんだ』というのはどういうような答えを言えればいいのかな？」

「（そ、そうだまづはそっちが先だった）……じゃあ直球で行くぞ。あんたは兄貴が好きなのか？ それともただの友人でしかないのか？」

「フフッ…それを聞いて何の意味があるんだい？ 君がそれを聞く理由なんて無いじゃないか」

「あたしがいない間に、部室で兄貴に変な事をしないか心配してる

からだ！」

「それは美咲って娘が十夜に膝枕してもらった事かい？」

な、何で知って…！？

「フツ、十夜に教えてもらったんだよ。勿論僕も後で彼に膝枕してもらうけどね？」

…そうだ、さっきの質問の答えだけどね。大好きだよ、僕は異性として十夜を愛している…フツ、これで満足かな？」

な、なななな…

「ふざけんな！ 何でお前が兄貴に膝枕って言うか何で兄貴を名前で呼び捨てしてるって言うか兄貴はあたしのもんだ！ お前にはやらねーぞ！！」

そ、それに…あ、愛してるだなんてそんな…／／／

「フツ、ふざけてるだ何ておかしい事を言うね？ まず膝枕の事だが、単に僕がやってももらいたいからさ。愛する男性が他の女に膝枕をしたなんて聞いたら我慢できるわけ無いだろう？ 呼び捨ての件だが、それも簡単な事だよ。僕が彼に『呼び捨てで良いか』と聞いたら彼が『別に構わない』と言ったからさ。

…最後の事だけど彼は君の物じゃあ無い。今は僕のものでも無いけど、必ず僕のものにして見せるよ？

フツ、兄離れの用意を済ませておくんだよ？」

そうか、分かった。

こいつは本気で兄貴が好きなんだな…？

「いいさ、分かったよ！ 今日からあたしとあんたは敵同士だ！

兄貴は絶対渡さねーからな！？」

「勿論さ。……それよりも、美咲って娘と十夜は今二人きりになつてると思っただけど…彼女は十夜をどう思ってるんだい？ 好意は持ってると思っただけど」

うわー！ 忘れてた！！ 折角美咲が兄貴と二人きりになるのを阻止するために新しく部員を入れることにしたのに、これじゃあ『ほんまつてんとう』って奴じゃねーかあああああ！？」

「ちくしょう、直ぐに部室に戻るぞ！」

「聡里って呼んで良いよ。君は僕の義妹になるんだからね…？ フッ」

「はっ！ 言ってる！ 兄貴は渡さねーからな！！」

とにかく戻らねーと！ 話し始めて10分は経ってるし、部室から離れてるから戻るにも少し時間がかかる！ 昨日みたいに美咲がまた変な事兄貴に要求してそーだ！！

「兄貴はあたしが守って見せる！」

「やれやれ、騒がしいな…（大好きなお兄ちゃんを独占したいだけだろくに）聞いた通りブラコンだな、この娘は（ボソツ）」

「ごちゃごちゃ言ってるで走れ！ 置いてくぞ！？」

聡里の奴足おせーんだよ！

「ちょ！？ 待ってくれよ、君が早いんだ！」

「確かにあたしは早い方だけど、それ以上に聡里が遅いんだよ！」

もういい、置いて行く！ スピードアップだ！！

——置いて行かないでー!?

遠くから聡里の叫びが聞こえたような気がしたけど、兄貴を助けるために全力を出したあたしの耳にはその叫びは入ってこなかった。

聡里と部員の顔合わせ（後書き）

ここ最近本当に寒くなってきましたねー。
皆さんも体を冷やさないようお気をつけください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3253y/>

俺の妹はヤンキーっぽい美少女である

2011年11月23日12時52分発行